

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

著名なギタリスト蒔野聡史まきのさとしは、恋人であり国際ジャーナリストの小峰洋子こみねようこが、パリから東京に着くのを心待ちにしていた。到着の当日、恩師の突然の入院と危篤きくを知らせる連絡をもらった蒔野は、あわててタクシーを拾い駆けつけるが、そのタクシーの中に携帯電話を置き忘れてしまった。洋子との連絡を取れる唯一の手段をなくした蒔野は、彼のマネージャーである三谷早苗みたにさなえに連絡を入れ、その携帯電話を自分のもとに届けてくれるように頼んだ。急いで携帯電話を届けようとする三谷であったが、蒔野に思いを寄せる彼女は、携帯電話に残されていた二人のメールのやりとりを見て、心が揺れ動く。

次は、携帯電話を届けようと、蒔野の元へ向かう三谷の行為と心情を描写した箇所である。

洋子が蒔野に似合っているというのは、彼女を絶えず苦しめる想像だったが、今ほどそれを強く感じたことはなかった。

洋子は、何もかもに恵まれて、華々①しい、自らの主役としての人生を生きている。そして、自分は今、蒔野の人生の脇役として、擦れ違いかけた二人の人生を、この携帯電話を届けることで再び結び合わせようとしている。なるほどそれは、他の誰にも務まらない重要な役どころに違いなかった！

① 三谷は、惨めな気持ちになった。残酷な皮肉だったが、そもそもは自分で買って出た役目だった。蒔野はその間に、洋子から着信があったとしても、まさか自分が傷つくとは夢にも思っておらず、暗証番号さえ教えるほどに、人間としては自分を信頼しきっていた。

エスカレーターで大江戸線の改札へと向かいながら、三谷はただ、蒔野に洋子と会ってほしくないと思いつめていた。そしていつか、その一念こそが、すっかり三谷を飲み込んで、三谷という一人の女のことを物憂く考えていた。

ホームのベンチに座って、蒔野の携帯に届いていた洋子のメッセージを見つめた。

② ひっきりなしに電車が往来し、その騒音にマギレ②まいとする乗客たちの話し声が、三谷をますます孤独にさせた。

三谷は、学校に行きたくないばかりに、自宅に火をつけてしまう少年のような、奇妙な勇氣へと追いつめられていった。重要なことは、とにかく、洋子と蒔野とが今夜会わないということだけだった。

洋子は蒔野に何を告げられれば、彼との関係を断念するだろうかと、そのことだけを考えた。問題は二人ではなく、二人の愛だった。

三谷は、徐(A)おもむきに顔を上げると、洋子と会って以来、蒔野が音楽的な危機に陥っているというのは事実なのだと自分に言い聞かせた。そして眉(B)ひそを顰ひそめた。

「洋子さんへ」と、蒔野の送信履歴を参考にメールを書き出すと、一気に次のように書いてみた。本当に送るかどうかは、またあとの話だった。

「連絡、遅くなってごめんなさい。」

あなたに謝らなければならぬことがあります。

ギリギリまで、ずっと悩んでいたのですが、僕はやっぱり、今回、あなたに会うことはできません。

もう何カ月も考えてきたのですが、僕の音楽家としての問題です。あなたには、何も悪いところはありません。ただ、あなたとの関係が始まってから、僕は自分の音楽を見失ってしまっています。状況を改善するために努力をしましたが、表面的にごまかし続けるのは、誠実じやないと思います。あなたに対しても、自分に対しても。

あなたのことがずっと好きでしたが、この先もそうである自信を持ってません。だったら、後戻りができるうちに、ケジメをつけるべきだと思います。

会ってしまうと、僕はまた自分を偽り、あなたを騙してしまうでしょう。

ただの友達として、また再会できる日を楽しみにしています。でも、しばらく気持ちを整理する時間が必要です。

あなたに会えたことを感謝しています。ありがとう。さようなら。

蒔野聡史

書いている間中、頬が冷たく火照ってゆくような奇妙な感覚だった。

送信しないまま、三谷は次に来た電車に乗って赤羽橋駅に向かった。蒔野に言って欲しかった言葉であり、彼女自身の思いであり、また願望であった、洋子とその意味を誤解する余地のない常套句(C)ていとうくの数々だった。

座席について読み返して、自分が書いたのではないような錯覚を抱いた。綴られた言葉から、蒔野の声が聞こえた。洋子と蒔野とが互いに連絡を取り合っているメールがあり、三谷自身の送信した仕事のメールがあり、そのあとに、蒔野が自分で書いたメールが未送信のまま残っているかのようだった。

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

三谷は、なぜか急に眠たくなって目を瞑った。駅に着くまでには、消すつもりだった。現実には現実として進んでゆく。その途中で、束の間、蒔野がこんなメールを洋子に送るところを夢想してみたとしても、誰からも咎められないはずだった。罪悪感に駆られて、自分は結局踏み止まり、すべてをなかったことにして、この携帯電話を無事に蒔野に届けるだろう。そうして、自分の蒔野への愛も、なかったことになる。――

もし送信したなら？ 洋子は、蒔野の世界からいなくなるだろう。消え去ってしまう。ただ親指で、この送信ボタンに一度触れるだけで。まるで魔法のようだった。自分じゃなくても、同じ状況になれば、誰でもきつと、そうするのではないだろうか？

濡れた革靴を擦り合わせて、三谷は苦しげに溜息を吐いた。唖の向こうの車内の明かりが眩しかった。先ほどの洋子の姿を思い出して、気の毒になった。胸が痛んだが、それもやがては忘れるに違いない。

自分は今まで、他人よりもずっと真面目に生きてきた。どんな人でも、死ぬまでにはきつと、それなりの罪を犯すはずで、それで言うと、自分の場合、許される罪の重さの制限に対して、まだまだ余裕があるはずだった。

目を開けると、夕食で酒が入ったららしい車内の乗客たちを眺めた。この人たちだって、人生にそういう後ろ暗い秘密の一つや二つはあるはずだった。

③ 誰も気づいていなかった。だったら、自分自身がすぐに忘れてしまえば良いことだった。針で自分の指を刺すようなもので、恐かったが、一瞬の痛みには違いなかった。

三谷は携帯電話の画面を開いた。そして、震える指で送信ボタンを押し、また目を瞑った。

十秒ほどして、とんでもないことをしてしまったと思ひ、慌てて携帯を見た。既に「送信完了」の表示が出ている。一人佇む洋子が、丁度今、着信に気づいた姿が想像された。

④ 当然、フリンに思っで電話かメールで連絡を取ろうとするだろう。すぐにバレてしまう！ どうしてこんな馬鹿なことをしてしまったのだろう？ 三谷は後悔に駆られて、たった今送信したばかりのメールを取り戻そうとしたが、その手立はなかった。

④ 絶望的なもどかしさに、彼女は血の氣を失った。

蒔野は絶対に、自分を赦さないだろう。激怒し、軽蔑し、自分をこそ彼の世界から消し去ってしまおうとするだろう！ ああ、どうすればいいのだろうか？ また新宿まで戻って、洋子に会い、すべてを打ち明けて謝罪し、蒔野にだけは言わないでほしいと頼むべきか。彼女なら、優しく、理解し、赦してくれるのではあるまいか。――あり得なかった。このままこの携帯電話を持って、どこかに行ってしまうか。

けれども、蒔野は他でもなく自分を待っていた。今は世界中の誰よりも、自分の到着を待っているのだった。洋子も、あれを読めば、もう連絡などしてこないのではないだろうか？

雨は一向に止む気配がなく、赤羽橋で降りて、傘を開いて歩き出すと、頭上でぼとぼと太鼓の撥で叩いているような音がしていた。

三谷はハツとして、蒔野の携帯を取り出すと、送信履歴から先ほどのメールを削除した。画面を見ながら歩いていて、彼女は大きな水たまりに気づかなかった。

足を踏み出すと、くるぶしまで浸かってしまい、慌てて後退った。その刹那――それは、誓ってわざとではなかった！――彼女は手を滑らせて、蒔野の携帯を、その水の中に落としてしまった。

⑤ 「あー！」

⑤ 急いでしゃがんだが、すぐには拾い上げず、少し躊躇ってから、その濁った水に手を突っ込んだ。画面は闇に閉ざされている。雫を拭いて、どのボタンを押してみても、何も表示されなかった。

(平野啓一郎、『マチネの終わりに』より)

(注) 問題文の漢字のなかには、問題作成者が必要に応じてふりがなを付した箇所がある。

国語「問題その三」

(21-11)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～③の漢字の読みをひらがなで示し、カタカナを漢字に直せ。なお、必要に応じて送り仮名もつけよ。

- ① 華々しい ② マギレ ③ フシン

問二 傍線部(A)「徐おもむろに」、(B)「眉ひそを擡ひそめた」、(C)「常套句じょうたうきゆう」の意味として適するものをそれぞれア～エから一つ選び、記号で記せ。

- | | | |
|-----------------------------|---|---------------------------------|
| (A) 徐 <small>おもむろ</small> に | (B) 眉 <small>ひそ</small> を擡 <small>ひそ</small> めた | (C) 常套句 <small>じょうたうきゆう</small> |
| ア 気をしずめて | ア 顔をしかめた | ア 気に入った言葉 |
| イ ゆっくりと | イ 涙がたった | イ 使い慣れた言葉 |
| ウ 心を決めて | ウ 眉をつり上げた | ウ 決まり文句 |
| エ 無意識に | エ 表情を緩めた | エ 殺し文句 |

問三 傍線部(1)「三谷は、惨めな気持ちになった」とあるが、その理由として適当なものをア～エから一つ選び、記号で記せ。

- ア 洋子が自身の人生の主役であるのに対して、自分は蒔野の人生の脇役に過ぎず、しかも今二人を結び合わせるような役回りをしようとしているから。
- イ 洋子は蒔野の似合いの相手であり、恋人となる資格をもつのに比べて、自分は取柄もなくありふれた人間であるように思われるから。
- ウ 蒔野の気持ち洋子に向いている以上、自分がどんなに蒔野のことを思い続けてみても、思いを成就させることができないと思知らされたから。
- エ 蒔野に信頼されている自分ではあるが、携帯電話を届けることによって蒔野と洋子のつながりが深まりこそすれ、自分の思いは顧みられなくなるから。

問四 傍線部(2)「三谷は、学校に行きたくないばかりに、自宅に火をつけてしまう少年のような、奇妙な勇氣へと追いつめられていった」とあるが、「奇妙な勇氣」の内容説明として適当なものをア～エから一つ選び、記号で記せ。

- ア 相手の弱みに付け入り、不幸な境遇に蹴落とそうとする勇氣。
- イ 自分の考えと異なっている、あえて実行しようとする勇氣。
- ウ 将来の安泰よりも、現在の利益を手に入れようとする勇氣。
- エ 目的達成のためには、手段を選ばず悪事を行おうとする勇氣。

問五 傍線部(3)「誰も気づいていなかった」とあるが、誰がどのようなことに気づいていないのか。五十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(4)「絶望的なものかしさに、彼女は血の気を失った」について、三谷の心情を五十字以内で説明せよ。また、この心情を表した情景描写を一文で書き抜き、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問七 傍線部(5)「急いでしゃがんだが、すぐには拾い上げず、少し躊躇ためらってから、その濁った水に手を突っ込んだ」とあるが、この時の三谷の心情を、内容全体をふまえて七十字以内で説明せよ。

国語「問題その四」

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

生後すぐに赤ちゃんは、大人（通常であれば、それは母親である）と、情動的なやりとりを含む「ことばの前の会話」をするようになる。このようなやりとりは、大人と赤ちゃんが交互に交代しておこなわれ、自分に対する相手の反応をモニターし、直接的な対面場面で、しかもユウキ的におこなわれるのが普通である。「ことばの前の会話」では、赤ちゃんは、相手（大人）の行動や情動を知覚するだけでなく、相手に向かう自分自身の行動や情動を知覚し、そしてそれに対するフィードバックを受ける。これは、ギブソンが主張した、乳児の物理的環境の知覚とまったく同じやり方でおこなわれるのである。つまり、僕らは、赤ちゃんが物理的環境との相互作用により知覚する物理的自己と対人との相互作用により知覚する社会的自己の相問をそこに見るのである。これが、ナイサーの提示した「対人的自己」の、① 個体発生的にはもつとも早い段階であろうと思われる。

トマセロは、こうした社会的自己は生後九か月から一二か月ころに、② 対人関係において劇的な変化が生じ、それが結果的に、よりセイジユクした社会的自己につながるとしている（Tomasello, 1995）。その劇的な変化とは、一言で言ってしまうと、赤ちゃんが、他者の意図に気づくようになるということである。一歳の誕生日を前にしたヒトの赤ちゃんは、ほかの人が「心理的にどのような状態にあるのか」ということの結果としてのふるまいを理解するようになる。たとえば、他者の注意がどこにあるかを理解し、他者が見ているところを追視したり（共同注意）、他者がまったく新奇な物や人に対してどのように感じているかを読み取り、それをもとに、それらに対する自分の行動を決定したり（社会的参照）、③ 他者が新奇な物に対しておこなっていることを、同じようにやろうとしたり（モホウ学習）するようになる。

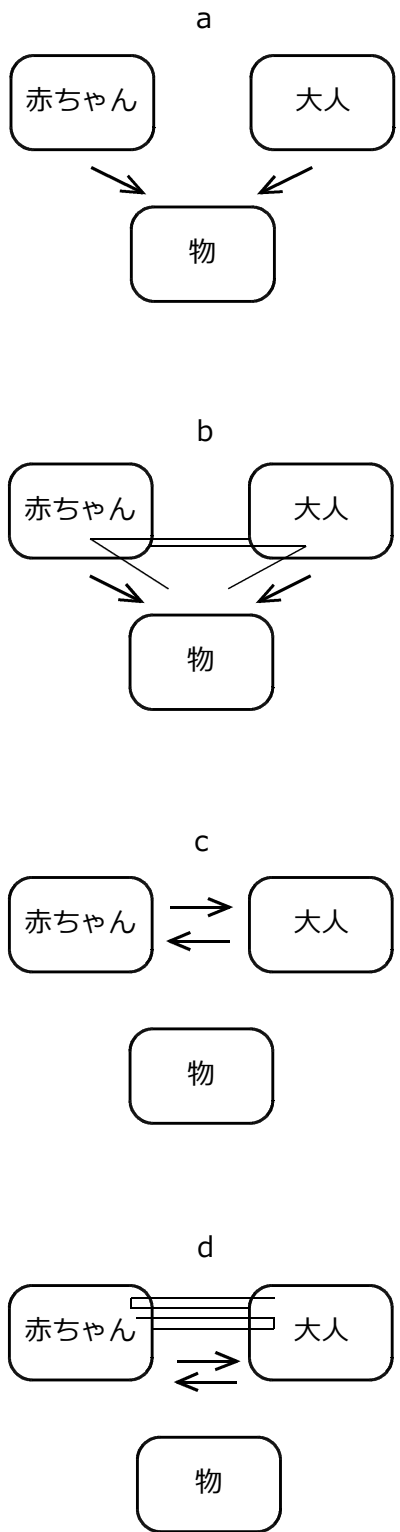
④ このような発達^④が自己理解において意味するところは何であろうか。トマセロは、以下の点を指摘している。
乳児が、他者の注意をモニター^⑤することができるようになったときに、たまたま相手が乳児自身に注意を向けることがあるかもしれない。そのとき、乳児は自分自身というタイショウ^⑥に向けて他者の注意をモニターするだろう。赤ちゃんは、自分自身をも含んでいる環境世界のどこに相手の意図的な注意があるのかをモニター^⑦できるようになるのである。これがジェームズのいう「me」の本質なのだトマセロは考える。
図に、トマセロが考える、こうした能力の発達をガイリヤク^⑧したものを示した。これは、ナイサーの言う、生態学的自己・対人的自己から、概念的自己へと展開される高次の自己への発達をサマライズ^⑨するものと考えてもよいかもしれない。

まず、九か月から一二か月に満たない赤ちゃんは、人や物と何らかの交渉を持つかもしれない。しかし、この二つが統合されたかたちでの交渉ではない。A、大人と同じ対象を赤ちゃんが見ているも、赤ちゃんはこのことには気づかない。赤ちゃんの視点からは、物だけなのである。また、この年齢では、赤ちゃんは、物にまったく関係なく大人を見られるかもしれない。この状態では、赤ちゃんは相手の大人の注意がどこにあるかまったく関知しない。その注意が、たとえ赤ちゃん自身に向けられていてもである。これはおそらく、前言語的会話であろうと思われる。

B、九か月から一二か月を過ぎるころになると、こうした状況は劇的な変化を見せ始める。⑩ この時期になると、赤ちゃんは、ただ物にのみ意識があるのではなく、大人の注意がどこにあるかに対しても意識があるのである。これは、通常、共同注意と呼ばれる。また特殊なケースとして、大人の注意が赤ちゃん自身に向くことがあるかもしれないが、赤ちゃんは、その注意が自分自身に向かっていることに気づいている。C、彼らの共同注意の対象が自分（me）であることを知っているのである。こうしたことは、自分に対する他者の注意をモニター^⑪することの始まりであり、そしてそれが真の自己概念の始まりだと、トマセロは主張する。

こうした他者の注意や意図の理解を経て、最終的には、三歳から四歳にかけて、他者の心的世界にある意図のみならず、他者の考えていることや信念の理解、すなわち、「心の理論」を発達させていくのである。

図 注意をベースにした物と人の関係



(板倉昭二、『自己の起源』より)

国語「問題その五」

(21—H)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

(注) 問題作成上、図を変更し、それに関する原文の一部を改めている箇所がある。

ギブソン (J.J.Gibson)	心理学者
ナイサー (U.Neisser)	心理学者
トマセロ (Tomassello)	心理学者
ジェームズ (W.James)	心理学者
サマライズ summarize	「要約する、要点をまとめる」の意

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

- ① ユウキ ② セイジユク ③ モホウ ④ タイショウ ⑤ ガイリヤク

問二 文中の **A** と **C** に適する接続詞を次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

- ア つまり イ そして ウ したがって エ けれども オ たとえば

問三 傍線部「モニター」という語が文中で五回繰り返されるが、文中のこの語の使い方として **不適当なもの** を次のア～カから二つ選び、記号で記せ。

- ア 追視する イ 理解する ウ 監視する エ 判断する オ 批評する カ 知覚する

問四 傍線部(1) 「そこ」とはどのようなことか。詳しく説明している箇所を本文から抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問五 傍線部(2) 「対人関係において劇的な変化が生じ」と述べられているが、その変化を具体的に説明している箇所を本文から抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問六 傍線部(X)、(Y)で述べられている内容と合致するものを、「図注意をベースにした物と人の関係」のa～dからそれぞれ選び、記号で記せ。

問七 傍線部(3) 「このような発達が自己理解において意味するところ」とは何か。文中の語句を用いて六十字以内で説明せよ。

3 次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

アメリカのバイオリニストのジョシユア・ベルが初めて名器ストラダイバリを弾いたときの感動を「楽器が僕に教えてくれる」と語っていた。「名器は僕の弾き方をすぐに理解して、でもこういう弾き方のほうがいい、ここはこのような音も出せる、とリードする。楽器自体にこれまで接してきた名手の音楽が積み重なっているのだろう。弾いていると、技術面だけでなく、深い音楽的な発見をもたらしてくれる」と分析していた。名器に**ミセラレ**^①た彼は入れ替えを重ねて現在、3台目のストラダイバリを弾いている。

^① 楽器に関して、基本的には、弘法筆を選ばず、という言い方は成り立たない。いかなる名手でも悪い楽器で弾いた場合は十分に実力は発揮できない。しかし、録音でしか聞いたことはないが、神童と言われた渡辺茂夫が昭和20年代に子供用の楽器で演奏した記録は、信じられないほど美しく神々しい音^②を響かせていた。そこが楽器の不思議なところでもある。奏者が愛して、一体となっている楽器ならば、その奏者が弾くときには名器になる場合もあるのだろう。人との出会いに似ている。

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

ヨーロッパにも留学していたある女性バイオリストが病気で亡くなった。絶えず弾いていた楽器を、残された母親が娘の母校の若い学生に活用してほしいと、寄贈の申し出をしたときに立ち会った。彼女を知っている人たちに聞いてみると、笑顔の明るい、誰もが好意を持ってしま

う人で、特にモーツァルトは絶品だった、と思いがいくつも語られた。
楽器はイタリアの古い名器である。金銭的に大変な思いをして購入したと聞いたが、寄贈となると学校の資産として正確に記録しなければならぬ。鑑定書も付いていたが、学校で内々に新たな鑑定^③イライをするとのことだった。その結果、二束三文、の答えが返ってきた。イタリアで作られたことは間違いがないが、銘を偽造した贋作^{がんさく}であった。査定価格は言わずに、「お嬢様の思い出に大切になさってください」と返すことになった。

返すまでは、特別室の広いテーブルに一台だけ置いてあった。^③部屋に入つて、調弦し、音を出してみた。長い間、弾かれていなかったようで、病気の長さがしのばれた。弓の毛につける松ヤニもなく、かさかさした音がした。だが、すぐに、しっとりした感じになった。確かにモーツァルトが合いそうな、明るい純粋な音がする。コンクールなどさまざまな場面で共に喜怒哀楽を重ねてきた楽器だろう。彼女の短い生に思いを馳^はせた。

鑑定のためにむき出しで置かれていた楽器を、母親が持ってきた元のケースに戻そうと思った。内側に欧米の演奏家のサインがいくつも書いてある綺麗なケースを持って、夜、もう一度特別室へ向かうと、私が弾いたときよりはるかに美しいバイオリンの音がドアを通してもれ聞こえていた。ノックして入ると、誰もおらず、楽器は元のまま置かれていた。

^④ 思いを馳せているうちに自分の耳の中で聞いている気がしたただけなのだろう。それは楽器が記憶している音であったのかもしれない。これも間違いなく名器だ、と思った。

(梅津 時比古、『毎日新聞』二〇二〇年三月二十八日「音のかなたへ」より)

(注) 渡辺茂夫 (1941～1999) 戦後復興期の日本で活躍したバイオリスト。

問一 傍線部①～③の漢字の読みをひらがなで示し、カタカナを漢字に直せ。なお、必要に応じて送り仮名もつけよ。

- ① ミセラレ ② 神々しい ③ イライ

問二 傍線部(1) 「楽器に関して、基本的には、弘法筆を選ばず、という言い方は成り立たない」とあるが、どういう意味か。次のア～オから一つ選び、記号で記せ。

- ア 名手は良い楽器を使わなくても、すばらしい演奏ができるということ。
イ 名手が良い楽器を使えば、良い演奏をすることができるとのこと。
ウ 名手が使用すれば、どのような楽器であっても名器になるということ。
エ 名手は楽器が高額であればあるほど、良い演奏ができるということ。
オ 名手にあつては楽器の良し悪しが演奏の評価に影響するということ。

問三 傍線部(2) 「絶えず弾いていた楽器を、残された母親が娘の母校の若い学生に活用してほしいと、寄贈の申し出をしたときに立ち会った」とあるが、「絶えず弾いていた楽器」は、実際はどのような物であつたか。三十字以内で答えよ。

問四 傍線部(3) 「部屋に入つて、調弦し、音を出してみた」とあるが、筆者はこのバイオリンをどのようなものと思つたか。本文から一文で抜き出し、はじめと終わりの七字を記せ。(句読点を含む)

問五 傍線部(4) 「これも間違いなく名器だ、と思つた」について、筆者がこのように感じたのはなぜか。五十字以内で説明せよ。

問七		問六			問五	問二	問一					
堵	他	連	携	はじめ	持	に	自	て	を	蒔	A	①
の	人	絡	帯	雨	ち	対	分	い	終	野	イ	はなばなしい
気	に	を	電	は	。	処	の	な	わ	を	B	②
持	知	取	話	一		す	行	い	ら	騙	ア	紛れ
ち	ら	り	が	向		る	為	と	せ	っ	C	③
。	れ	合	水	に		方	に	い	る	た	ウ	不審
	る	う	没	止		法	罪	う	企	メ	④	
	こ	こ	で	む		が	悪	こ	み	ー	⑤	
	と	と	故	終わり		分	感	と	を	ル	問三	
	な	が	障	音		か	を	。	、	を	問四	
	く	で	す	が		ら	持		自	洋	ア	
	消	き	れ	し		な	ち		分	子	①	
	去	ず	ば	て		い	な		以	に	②	
	で	、	、	い		焦	が		外	の	③	
	き	自	蒔	た		り	ら		誰	二	④	
	る	分	野	。		や	、		も	人	⑤	
	と	の	と			不	そ		も	の	⑥	
	い	行	洋			安	の		気	の	⑦	
	う	為	子			の	こ		づ	関	⑧	
	安	も	は			気	と		い	係	⑨	

問七	問六	問五	問四	問二	問一
を	(x)	はじめ	はじめ	A	①
に	c	他	赤	ウ	有機
大	(y)	者	ち	B	
人	b	の	や	エ	②
の		注	ん	C	成熟
注		意	は	ア	③
、		が	、	問三	模倣
意		ど	相	ウ	④
図		終わり	終わり	オ	対象
が		る	で		⑤
自		よ	お		概略
分		う	こ		
に		に	な		
向		あ	わ		
か		る	れ		
う		意	る		
こ		図	こ		
と		や	と		
の		、	の		
理		信	理		
解		念	解		

問五	問四	問三	問一
に	はじめ	物	名
愛	コ	で	器
と	ン	安	と
し	ク	価	し
一	ー	な	て
体	ル	も	高
化	な	の	額
し	ど	。	で
た	終わり		購
楽	た		入
器	楽		し
で	器		た
あ	だ		楽
れ	ろ		器
ば	う		だ
、	。		っ
名			た
器			が
と			、
呼			奏
ぶ			者
			が
			、
			偽